

# 大学における導入教育

## —「学習技術」の運用に向けて—

A Collegiate Introductory Study  
— Toward the Management of "Gakushu Gijutsu" —

上 村 和 美\*

Kazumi UEMURA

### 抄 録

本稿は、昨今取り上げられることが多くなってきた大学における導入教育について、関西国際大学(以下本学)の視点から考察したものである。導入教育は、既に本学においても、その取り組みが始まっている。本論では、まず導入教育とは何かということを再確認し、次に学習支援センターで実施しているショートプログラムの結果をまとめた上で、平成13年度から開講予定の「学習技術」という科目の基礎を構築する。

### 1. はじめに

大学生の学力低下が問題視されるようになって久しい。また、マスコミにおいても取り上げられる機会が多くなっている。各大学でも、この問題については検討し、試行錯誤しながら取り組んでいるというのが現状であろう。<sup>1)</sup> 本学でも、学習支援センターの活動を始めとして全学的に取り組んでいる。

学生の立場で考えてみると、高校生活と大学生活には明らかな違いがある。あらためてその相違点を考えてみると、「生徒」という呼称が「学生」となり、授業時間も高校時代の倍にあたる90分となり、時間割は与えられるものではなく自分で組み立てるものとなる等がある。また大半の高校では制服が存在し、着用が義務づけられているが、大学にはそれがほとんどない。したがって、新入生が入学時にこれらの変化に戸惑いを感じるのは当然であろう。特に学習面においては、与えられた問いに対する解答を見つけるという高校生活と同じ「問題解答型」のスタイルのままでは単位の修得は困難である。「問題解決型」へと移行することが必要なのである。本学では平成13年度よ

---

\* 関西国際大学専任講師

り新設予定の人間学部において「学習技術」という科目を開講する予定である。「学習技術」を簡単に言うならば「大学教育を受けるための技術」である。これは、本学におけるコモンベーシックスを受講する為にだけでなく、その先にある専門課程でも「学習技術」で得た知識を活用するということが目的としているのである。専門課程へ進んだ時点で、参考文献の探し方がわからない、レポートの書き方がわからないという初歩的な知識不足が生じているようでは、専門の内容を理解することはできないからである。

## 2. 導入教育の目指すもの

「導入」とは文字通り、大学生活への導入である。入学した時点から大学生という身分を得たわけであるが、学生の意識そのものは高校生のままであるのが普通である。生徒を学生へと変化させるのがこの「導入教育」の目的である。したがって「導入教育」を定義づけるならば、大学教育を受けるための最低限の「技術」を身につけるということで、いわば、ウォーミングアップのようなものである。「ガイダンス教育」と呼ばれる場合もあるが、概ね目標としているところは一致している。「学習技術」という科目も導入教育のひとつである。導入教育の柱としては次の3点が挙げられる。<sup>2)</sup>

- ① 意識
- ② 知識
- ③ スキル

①は文字通り大学生としての意識を持たせることであり、学習意欲の喚起や動機づけ、また大学教育の目的を理解させることである。②は大学のシステムや大学教育のシステムを理解させることで、具体的には履修方法やゼミの形態、カリキュラムの流れについての知識を身につけさせることである。③は“学ぶ”ための様々な能力のことで、具体的にはノートの録り方や文献検索、プレゼンテーションの方法等、大学の授業で必要となる基礎的な能力の育成である。導入教育では特に③のスキルに着目している。

既に導入教育をカリキュラム化して取り組んでいる先達には金沢工業大学の例がある。1995年度から大幅な教育改革を行い、入学直後の1学期(3ヶ月)を導入教育機関として明確に位置づけている。この中心にあるのが修学基礎科目とされるもので、「修学基礎能力演習」「フレッシュマセミナー」「自己啓発セミナー」「コンピュータ基礎演習」などの科目が設定されている。本論で取り上げる導入教育と最も関連のあるのが「修学基礎能力演習」である。ここでは、与えられた情報を受動的に習得する能力ではなく、自分が必要とする情報を情報検索という手段を用い、自分で見つけだす能力を身につけさせることを目標に据えている。さらに、「情報スキル」の次の段階に「表現スキル」を習得するように展開されている。

それならば、本学でもそのカリキュラムを援用できればと考えるところであるが、金沢工業大学と本学とでは以下のような相違点がある。

- ・理系と人文系
- ・図書館の規模
- ・特定の科目の基礎と、学習技術全般

したがって、本学において実施するにあたっては先達の例を援用しながら、人文系の大学における「学習技術」を構築していく必要がある。

## 2. ショートプログラムの実施について

### 2. 1 ショートプログラムの内容

ショートプログラムとは本学の学習支援センター（以下センターと略す）において提供される短期集中型のプログラムである。筆者はセンターの委員であり、このプログラムを実施するにあたっては教材作成に携わる機会を得た。平成11年度中に実施したのは以下の3プログラムである。なお、各プログラムは同一内容を各2回ずつ実施した。

1. 平成11年度春学期 「講義の攻略法－要点はこうしてつかめ！！－」
2. 平成11年度秋学期 「ワープロを使った効率的なレポート作成術」
3. 平成11年度秋学期 「わかりやすい文を書くには－文章作成法－」

各プログラムの内容は次の通りである。

「講義の攻略法－要点はこうしてつかめ！！－」

- ・講義を受ける前に
- ・要点を聴きとるには
- ・ノートの工夫
- ・講義を受けた後には

このプログラムでは、主にテイク・ノートの方法について講義した。講義を受ける前・講義中・講義を受けた後の3つに分けて、何を行うべきかを述べている。講義を受ける前に行うことは、たとえば予習するというような大儀なものではなく、あらかじめテキストに目を通しておいたり、講義が始まる前に前時間に録ったノートに目を通しておく等、学習習慣についてのちょっとした心がけをまとめている。「要点を聴きとるには」では、「ノートの工夫」では、日付を記入する、ノートに線を引いて分割して使用する等の事例も紹介している。

「ワープロを使った効率的なレポート作成術」

- ・ワープロを使ったレポート作成の手順
- ・執筆方法
- ・プロット
  - －プロットとは
  - －文章構成の基本
  - －テーマの見つけ方
  - －プロットを考える
- ・Word 操作（1）
  - －コピー（カット）&貼り付け
  - －注をつける
  - －表を作成する
  - －フォント
- ・Excel とのデータ互換
  - －Excel で作成したグラフを利用する
  - －文献データの蓄積と活用（Excel のデータベース的利用）
- ・Word 操作（2）
  - －推敲と校正
  - －レイアウト設定
  - －プレビュー

このプログラムでは、ワープロを「清書の道具」ではなく「思考の道具」として使用することに主眼をおいた。原稿用紙に書いたものを見ながらワープロで入力するのではなく、アイデアをまとめるといった作成の初期段階から活用していくということである。また、学部生に関しては、自分自身が所持するノートパソコンを活用させるためである。ただし、ノートパソコンの所持が義務づけられていない短大生のことを考慮して、2回の実施の内1回はパソコン実習室でも行った。また実習スタイルのプログラムのため、人数制限を設けて受講希望を募った。

内容としては90分で実際にレポートを作成することは無理なので、あくまでも「模擬的にレポートを完成させる」ようにした。つまり、センター側がワープロで作成したデータと表計算ソフトで作成したグラフデータをあらかじめ準備しておき、学生はそれらを加工することにより、レポートの体裁を整えるというわけである。当日にスムーズに作業が行えるように、受講生にはあらかじめデータをダウンロードしておくように指示した。また、データとしては、平成10年版「国民生活白書」および経済企画庁のホームページ（URL <http://www.epa.go.jp/>）を利用した。

「わかりやすい文を書くには－文章作成法－」

- ・はじめに
  - －「わかりやすい文」は悪文を意識することからはじまる
  - －日本語の単位
- ・わかりにくい文
- ・なぜわかりにくいのか？
  - －読点の問題

- 一文の長さの問題
- 修飾語と被修飾語の問題
- 表記の問題
- 対応の問題
- 重複の問題

- ・どこがわかりにくいのか（練習問題）
- ・日本語の語順—かきませ文を中心として

「文章作成法」と銘打っているものの、文章そのものを作成する内容ではなく、文の誤りを見つけて訂正する演習形式をとった。わかりやすい文を書くためには、まずわかりやすい文とはどういうものか、言い換えるならば、なぜわかりにくい文となるのかを知ることがスタートとしたのである。また、今回は「文章」ではなく、それより小さい単位となる「文」を対象とした。筆者自身が学生の文章を目にした際に気になる点を、特に6つのポイントに絞り込んで実例を交えながら、どう訂正すればよいのかを表した。このプログラムは、さらに「わかりやすい文章を書くには」へと発展させていく予定である。

## 2. 2 ショートプログラムの実施結果

それぞれのプログラムの受講者数の合計は表1の通りである。

表1 ショートプログラムの受講者数

プログラム	受講者数
1	40
2	38
3	15

本学には学部・短大部・専攻科を合わせると892名の在籍者がいるので（平成11年10月1日現在）、総体的に見ても、決して受講者数が多いとは言えない。それはショートプログラムが正規の科目ではなく、あくまでも希望者を対象としたものであるということに因るところが大きい。センターのスタッフが「これは学生にとって有益だ」と考えて準備したプログラムであっても、学生自身が必要性を感じなければ受講しないのである。

各プログラム終了後には、今後の資料としてアンケートを実施した。結果は、自由筆記の部分を除いて表2～4に表した。いずれも、ショートプログラムを何で知ったかという受講動機を尋ねる設問については、複数回答を認めた。

表2 プログラム1受講者アンケート結果

1. このショートプログラムは何で知りましたか？

a. ガイダンスで	7
b. アドバイザーから	25
c. 掲示を見て	5
d. 友達から	6
e. その他	0

2. 受講してみようと思ったきっかけは何ですか？

a. 興味があったから	14
b. 友達を受けるから	6
c. アドバイザーからすすめられて	20
d. その他	0

3. 受講してみてどうでしたか？

a. 全体が理解できた	21
b. 一部が理解できた	18
c. ほとんど理解できなかった	0

春学期に実施したプログラムであったので、センターのガイダンスでも告知を行ったが、受講の動機はアドバイザーからの勧めが最も多くなっている。これは入学時に実施された「学習技術診断テスト」の結果によりアドバイザーが受講を勧めたという背景と深く関連している。また、興味があったから受講したという積極的な動機も見逃せない。総体的には、学生の満足度が高かったのだが、自由筆記の部分では、「高校で習ったことばかりであった」「要点のつかみ方をもう少し詳しく知りたい」という意見も出ていた。

表3・4共に、問1は、プログラム2・3のどちらのプログラムを受講しているかを質問するものである。結果には含めていない。また、春学期に実施したアンケートの「3. 受講してみてどうでしたか」という質問項目では曖昧なため、理解度と満足度が明確になるように新たに設問を増やした。受講の動機としては、やはりアドバイザーからの勧めが圧倒的である。これは特に学部の基礎ゼミについては、アドバイザーを通じて申込用紙を配布してもらったことが大きく関係していると考えられる。当初はセンターのみで受け付ける予定であったが、やはりセンターに直接足を向けるのが面倒だったりするようで、このような策を講じたのである。

また、春学期の受講生が自由筆記による感想を多く書かれていたのに対して、秋学期は少なかった。希望的な見方としては、大学生として1つの学期を経てきており、自分なりに学習技術を身につけているので受講が必要ないと判断しているとも考えられる。また本プログラムは、当初はセンター独自のプログラムであったが、「学習技術」の目標と一致するものが多いため、結果的にはパイロットスタディとなっている。実際に「学習技術」が開講されてからのセンターとしての運用については、今後検討する必要がある。

表3 プログラム2受講者アンケート結果

2. このショートプログラムは何で  
知りましたか？

a. 学習支援センターで	0
b. アドバイザーから	33
c. 掲示を見て	6
d. 友達から	0
e. その他	0

3. 受講してみようと思ったきっかけは何ですか？

a. 興味があったから	8
b. 友達を受けるから	1
c. アドバイザーからすすめられて	28
d. その他	1

4. どの程度理解できましたか？

a. 全体が理解できた	23
b. 一部が理解できた	13
c. ほとんど理解できなかった	2

5. どの程度満足できましたか？

a. とても満足した	8
b. やや満足した	25
c. どちらでもない	3
d. やや不満	2
e. とても不満	0

表4 プログラム3受講者アンケート結果

2. このショートプログラムは何で  
知りましたか？

a. 学習支援センターで	0
b. アドバイザーから	12
c. 掲示を見て	4
d. 友達から	0
e. その他	0

3. 受講してみようと思ったきっかけは何ですか？

a. 興味があったから	7
b. 友達を受けるから	0
c. アドバイザーからすすめられて	8
d. その他	0

4. どの程度理解できましたか？

a. 全体が理解できた	8
b. 一部が理解できた	7
c. ほとんど理解できなかった	0

5. どの程度満足できましたか？

a. とても満足した	7
b. やや満足した	7
c. どちらでもない	1
d. やや不満	0
e. とても不満	0

#### 4. 「学習技術」の運用に向けて

「学習技術」は、本学に平成13年度に新設予定の「人間学部」で1年次春学期に開講される科目である。この時期に実施するのは冒頭で述べたような理由によるものである。

実際の運用に関してまず問題となるのは、この科目を必修科目とするか選択科目とするかということであろう。同一のスキルを修得させるという点においては必修にすべきであるが、ショートプログラムのアンケート結果に「高校で習ったことばかりであった」が含まれていたことからわかるように、既にスキルを体得している学生にとって、半期間の受講は苦痛でしかない。それどころか、大学生活への失望を生みかねない。こう考えると、選択科目であるほうが合理的であろう。た

だし、入学時に受講が必要か否かのプレースメントテストを実施し、その結果により受講者を決定する必要はある。

しかし、何を持って学習技術を計測するのかが問題となってくる。既にバージニア工科大学やミネソタ大学ではStudy Skillsの診断が行われている。<sup>3)</sup> 本学でもこれらを参考にしながら、独自の診断テストを開発していく必要がある。その際には、誰が採点しても同様の結果が得られるような内容でなければならない。また、読書の習慣があるか、授業中に判らないところがあった場合に先生に質問するかといった学習態度に関する内容と、漢字の書き取りができる、分数の計算ができる等の知識を問う内容とを区別した上で、その両方が診断できるようにしておかなければならない。

半期（12回と想定）の「学習技術」の内容としては、大きく次の5点を考えている。

- ・ノートのとり方
- ・要約の方法
- ・文献検索
- ・ワープロの使い方
- ・論文作法

ここに挙げた以外にもプレゼンテーションも考えられるであろうが、半期12～13回程度という実施時間を考えると現実的ではない。また、相互間の関連については、図1のようにモデル化しておく。

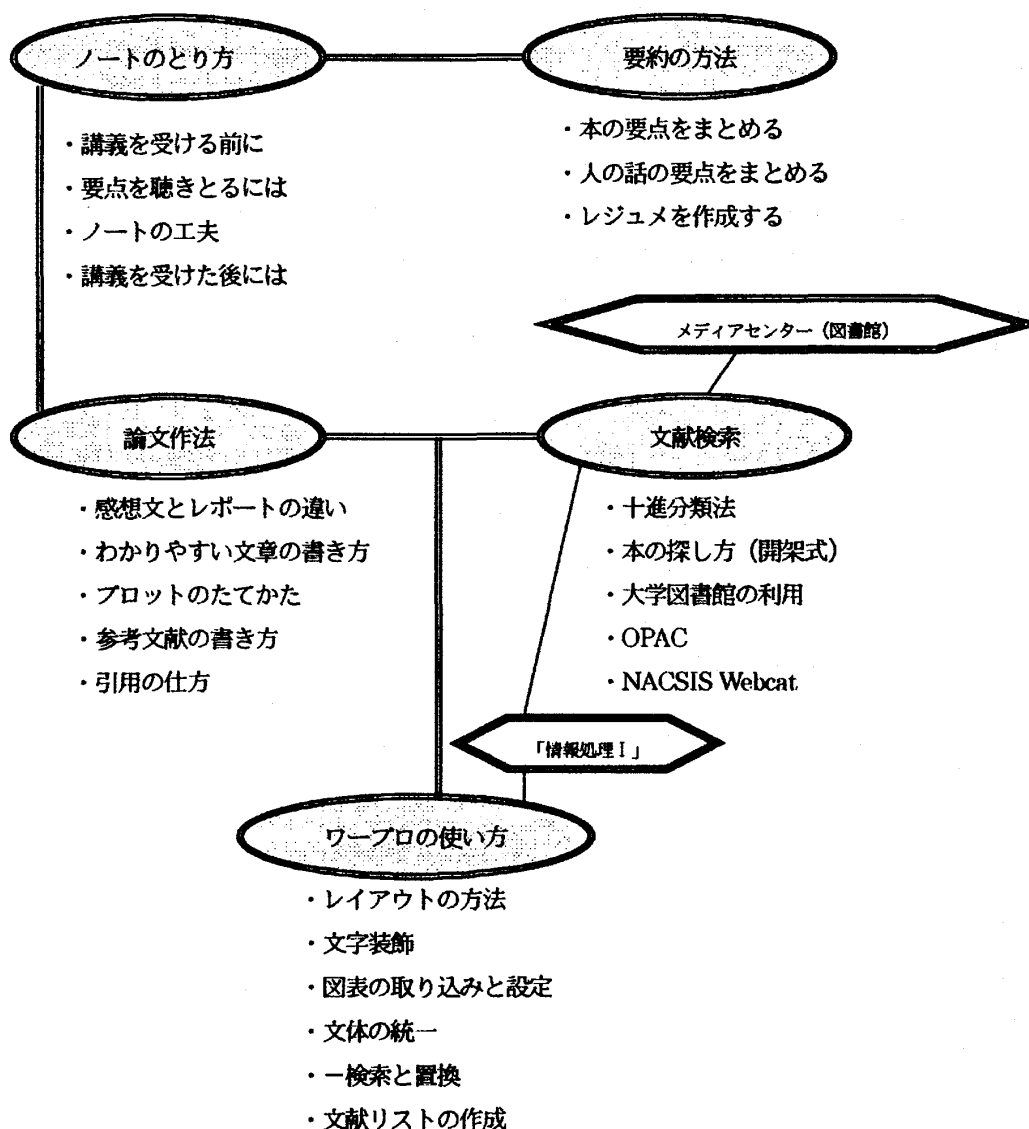
図からも読みとれるように、「学習技術」という科目は単独で成立するのではなく、他の科目や機関との綿密な連携が必要である。特に文献検索においては、メディアセンター（図書館）との連携が必須である。実際にレポートを書く段階に至った際に、初めて図書館に足を踏み入れたという状況では資料の活用どころではないからである。高校生までは、あくまでも「図書を借りる」という狭義の意味での図書館利用であったと考えられるが、大学図書館では「資料を活用する」という広義の意味での図書館管理用の方法を身につける必要がある。つまり、現物が目の前になくても、大学図書館を通じて他大学から取り寄せることができるというようなサービスについても知っておく必要があるのだ。しかし、実際にサービスを提供する図書館側にも様々な事情があるので、実状をふまえた上での連携が必要なのである。

ここでは、ワープロを使ってレポートを作成できるようになるということを「学習技術」の到達点としたい。ハードルが低いとの意見があるかもしれないが、これ以上の内容を盛り込むことは消化不良を起こすことにつながり、学生にとってはかえって逆効果となってしまいうからである。

もちろん、まだ完全なものではないので、実施までの間にはパイロットスタディを行うと共に、効果的な内容の提示の順序、他大学の状況も視野に入れながら、更に内容の強化・整備を行う必要がある。



図1 「学習技術」の概念図



！日本語入力については「情報処理I」で終わっていると想定。

## 5. むすびにかえて

「導入教育」というのは新しい分野で、この分野の専門とする教員はいないと言っても過言ではない。その意味では、教員全体で検討できうるものである。基礎演習担当者、専門演習担当者、それぞれの立場からの「学習技術」の必要性を検討し、よりよい内容を構築していくべきであろう。

しかし、学生への過度のサービスは学生の自主性を養うことを妨げてしまう。学習とは、あくまでも学生の自主性によるものだからである。「学習技術」の内容には、従来ならば、学生各自が自分自身で会得していったものも多く含まれている。筆者自身も「レポートの書き方」のようなハウツー本を何冊も読んだりしてその中からレポートとは何かや、レポートの形式とはどういうものを学

んでいった記憶がある。しかし、現在の学生にはそのような自主性があまり見られない。したがって、初期の段階では教員による補助が必要になるのであろう。しかし、いつまでも教員が全てを手助けしているようでは、学生の自立はあり得ない。いつの時点で補助をなくすのか、その匙加減が微妙である。

#### <注>

- 1) 山田礼子・中島智子：「大学における導入教育の意味と課題—学部長調査の結果から—」日本教育社会学会第51回発表レジュメ，1999年10月の調査結果でも各国交私立大学の取り組みがわかる。
- 2) 「特集 大学“教育”改革の胎動」【Between】，1999年5月号，進研アド，pp16-17
- 3) 1999年10月30日に行われた関西国際大学・高等教育研究所の研究会において，神戸大学の川嶋太津夫氏からその詳細が紹介された。

#### 参考文献

- 浅羽通明：「大学で何を学ぶか」，幻冬社，1996。
- 轡田隆司：「『考える力』をつける本」，三笠書房，1997。
- 経済学教育学会編：「大学の授業をつくる—発想と技法—」，青木書店，1998。
- 武田 忠：「学ぶ力をうばう教育—考えない学生がなぜ生まれるのか—」，新曜社，1998。
- 中岡慎一郎：「大学崩壊—現職教官が語るその実態と改革案—」，早稲田出版，1999。
- 和田秀樹：「学力崩壊—「ゆとり教育」が子どもをダメにする—」，PHP研究所，1999。
- 【Between】，進研アド，5月号，1999。
- 【Between】，進研アド，6月号，1999。
- 【Between】，進研アド，7-8月号，1999。
- 【Between】，進研アド，10月号，1999。
- 【Between】，進研アド，11月号，1999。
- 【Between】，進研アド，12月号，1999。